ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㊻ 映画プロデューサー 叶井俊太郎

段階的ではない人生の終わり

人生の最終章について講演会などでお話をすると時々、こんなことを言われます。

「先生の話は興味深いですが〈死の五段階〉の視点がないですね」

「好きじゃないんですよ、ああいう話は…」と答えると「医者のくせに長尾はアホやなあ」みたいな顔をされることも。〈死の五段階〉とは、精神科医のエリザベス・キューブラー・ロスが、『死ぬ瞬間』（1969年）という著書の中で、死を宣告された人の心の変化についてまとめたもの。

第一段階は、「否認と孤立」（自分が死ぬなんて何かの間違いだ！　という気持ちから、周囲から孤立するようになる）。

第二段階は、「怒り」（死ぬのが間違いではないとわかると、どうして私なのか！と怒りに変わる）。

第三段階は、「取引」（神様などに対し、良い行いをするから死を先延ばしにしてほしいと頼む）。

第四段階は、「抑うつ」（肉体や容姿が衰え死を意識せざるを得なくなり、気持ちが落ち込む）

第五段階は、「受容」（これまでの葛藤や苦痛を乗り越えて、死を受け入れるようになる）

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。公益財団法人日本尊厳死協会副理事長としてリビング・ウイルの啓発を行う。映画『痛くない死に方』『けったいな町医者』をはじめ出版や配信などさまざまなメディアで長年の町医者経験を活かした医療情報を発信する傍ら、ときどき音楽ライブも。

最初に本書を読んだときは僕もなるほど！と思いました。しかし在宅医としてお看取りをするようになってからは「人間が、そんな一筋縄でいくわけないやんか」という感想しかありません。

この人の本を読んで、そんな思いを強くしました。映画プロデューサーの叶井俊太郎さんが、2月16日、東京都内の自宅で、妻で漫画家の倉田真由美さんらに看取られて亡くなりました。享年56。

叶井さんは2022年に膵臓がんのステージ3で余命半年と宣告されていました。抗がん剤などの標準治療を受けず、最後まで仕事をし続ける選択をし、昨年10月には『エンドロール！　末期がんになった叶井俊太郎と、文化人15人の〝余命半年〟論』を出版しました。その破天荒な死生観に僕は何度も笑ってしまいました。出版後の文春オンラインのインタビューではこんな発言をしています。

「死ねねえんだよ。困ってんだ、俺も」

僕は、叶井さんの生き方にとても共感しました。さすが、600人の女性とセックスして（相手の顔も覚えていないとか…）、4回結婚して、破産を経験した伝説の映画プロデューサー。何も死を恐れてはいない様子。だけど、痛いのは勘弁だという。「安楽死させてほしい」とも話していました。

今後の医学部教育でぜひ、キューブラー・ロスの本と合わせて読んでほしい名著です。「取引」も「怒り」も「受容」も段階的に訪れるものではなく、人間は毎日ぐちゃぐちゃと、いろんなことを考える。そのぐちゃぐちゃの中で、ある日不意に人生は終わるのです。